

問題【国語】

次の詩を読んで後の問いに答えなさい。

(1) 風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けぬ
丈夫なからだをもち
欲はなく 決して怒らず
いつも静かに笑っている
一日に (2) と 味噌と少しの野菜を食べ
あらゆることを 自分を勘定に入れずに
よく見聞きし分かり そして忘れず

(中略)

褒められもせず 苦にもされず
さういふものに わたしはなりたい

問 (1) (1) と (2) に適切な語句を入れましょう。

(2) この詩の作者名を答えましょう。

豆知識 雑学コラム

作品の周辺知識も忘れずに

さて、今回は宮沢賢治の「雨にも負けず」についてみていきましょう。教科書にも出てくる作品なので、読んだことがあり、暗唱できる方も多いと思います。

宮沢賢治は農学校の教員などの仕事の傍ら作家活動をしていた作家で、この詩は宮沢賢治が病にかかったときに、書いた詩として知られています。そして、この詩を通して、質素で謙虚な生き方を理想としていることを伝えています。そう考えると「一日に玄米四合」はかなり食べすぎで質素ではないように感じますよね。しかし、実際には食べすぎというわけではありません。なぜ食べすぎではないのか、見ていきましょう。

機械化が進んだ現在に比べて、宮沢賢治が生きていた1920年代から1930年代にかけては、農作業は重労働で、その分エネルギーが必要でした。また、現代とは違い、おかずがあまりなく、少ないおかずでたくさんのお米を食べる生活でした。

当時、軍人が一日にお米を6合食べていたと聞くと、決して「一日に玄米四合」が多くはないと納得できると思います。時代によって、食べるものだけでなく、食べる量も違うというのは面白い発見ですよ。

さて、「雨にも負けず」は、宮沢賢治の死後発見された手帳に書かれていて、その後、発表されました。宮沢賢治がこの詩について、発表して有名になろうという「欲はなく」、また、「褒められもせず 苦にもされず」生きてきたといえます。宮沢賢治の思いが文字に書いてある通りであれば、宮沢賢治は理想通りの人生を歩めたのではないのでしょうか。皆さんはどう思いますか。

このように、文学作品で筆者がどんなことを言いたかったかを理解するためには、作品の時代背景や筆者についての理解が大切になってきます。作品の周辺知識を「よく見聞きし分かりそして忘れず」に読んでみましょう。

【解答】

宮沢賢治 (2)

号四米玄 (2)

よく見聞きし (1) (1)